

せめて清潔な顔になりたい

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

人は見た目でも何もかも決まってしまうと書いた人がいる。なんでも、成功する人の九割が目によるんだそうだ。

そう言われても、生まれつき見た目が悪く、今さら自分の顔を変えるわけにもいかないし、立ち居振る舞いを改善して別人のようにすることもできないとしたら、いったいどうすれば良いのだろう。

中には、顔を整形して「いい顔」「美しい顔」になろうとしたり、営業用の特別な態度を身につけてイメージを変えようとする人もいるが、今度はそれのおかげで、かえって悪い特徴を背負い込んでしまうこともある。

つまり、喋ったり、笑ったり、お辞儀をしたりする様子がなんとなく嘘っぽく、顔もだんだん偽善者ふうの容貌に変わってしまい、かえって人々の警戒心を引き起こすことにもなりかねないのだ。

生まれつき人好きのしない顔で、口下手なうえに取っつきも悪く、することなすこと人々の反感を買うような自分は、いったいどうしたら良いのだろうと、考えてしまう人も少なくはない。

「人は見た目が九割だ」と言われても、もともと見た目の悪い自分では、商談もうまく行かないだろうし、尊敬される仕事にもつけないだろう、異性に愛されることもないだろうと、最初から成功を諦めてかからねばならないことになる。

そういう人には、こう言ってやったら良いだろう。今さら「いい顔」や「美しい顔」になるのは無理だとしても、「清潔な顔」にはなれる。これを目指して行動したらどうかと。

しかし、「清潔な顔」と言っても、それはどんな顔なのだろう。あなたは「清潔な顔」という言葉で、いったいどんな顔を思い浮かべるだろう。

この世で最も清潔な顔は、イエス・キリストの顔だと言った人がいる。

確かに、絵画に描かれたり、彫像として造られたイエスの顔をよく見ると、それは決して単に「いい顔」とか「美しい顔」と言えるものではない。その中には、十字架上で苦悶する顔や歪んだ顔も混じっているからだ。

しかし、画家や彫刻家が描き出そうとしたのは、人間的なイヤミやケガレのない高貴な顔であったことは間違いない。人々を信仰に導くためには、人々の心を魅了せずにはいないような聖なる顔が必要だったからである。

日常的な言葉で言えば、汚れのないキレイな顔、つまり「清潔な顔」が必要だったのであって、これは聖母マリアの顔やブツダの顔についても言えることである。

しかし、私たちは今日、イエス・キリストが実際にはどんな顔をしていたのか知らない。通常は、痩身に長髪、髭の濃いイエスの容姿を私たちは見ているが、実際のイエスがどんな体形で、どんな髪型だったのか、そもそもどんな顔つきだったのかは誰も知らない。

もしかすると、イエスは肥っていたかも知れないし、短身だったかも知れない。人々に愛されるが、また殺意を抱かせるような存在であったことは確かである。イエスは醜かったのか、美しかったのか。

画家や彫刻家は、イメージの効果をよく知っていて、清潔で聖なる顔を大衆に見せ、信仰への道を大きく広げようとしたのに違いない。

しかし、この顔はイエスの思想や精神を象徴するものであって、見た目がどんなに良くても、聖書に書かれたイエスの言葉がなければ無意味である。

人は見た目が九割かも知れないが、その九割を支えもし、壊しもするのは言葉であるということ、このイエスの例がよく示していると言えよう。人は、外観によって誘われたり騙されたりはするが、結局のところ、真理を伝える言葉が無ければ何も信じない。

人はせっかく手に入れたものを、たった一つの言葉で失ってしまうことが多い。不用意な一言で、これまで築き上げた地位を失ってしまう政治家や実業家をよく見るし、ふと洩らした些細な言葉で、長年の愛にヒビが入ってしまったという男女もいる。

このたった一つの言葉がどこから来るのかと言えば、それを口にした人間の心や精神に原因があると看てもよいであろう。失言は想像以上にその人間の本質的な部分に関わっているのである。

そういう人間の心や精神の状態を読み取り、見た目を確認する方法はないだろうか。イエスの精神を「清潔な顔」で描き出そうと試みた画家や彫刻家たちの想像力は、必ずしも的はずれではなかった。

清潔な精神は、清潔な目つきや表情となって現れ、不潔な精神は、不潔な目つきや表情となって現れる。清潔な顔や不潔な顔は、心や精神の状態を象徴するものとして意味を持つであろう。

しかし、清潔なもの和不潔なものを読み取り、見た目どおりの価値を判断することは難しい。見る者と見られる者のいずれにも、精神的な修練と向上が必要になるであろう。

たとえ年月にまみれ、美しさを失った老残の顔でも「清潔な顔」というのはあり得る。「清潔な顔」を目指し、心や精神が生み出す真の言葉を求め、それを表現することこそ、成功の道と言えるのではないだろうか。

[2007/09/17 magmag]